

No.115



佐久地方の箱清水式 (財)長野県埋蔵文化財センター
2015『西近津遺跡群』より

箱清水と樽への 文物の往来

小山岳夫

弥生時代後期後半の長野県千曲川流域は箱清水土器様式圏、群馬県は樽式土器様式圏と括することができる。両土器様式圏は共に弥生中期の栗林式土器を遡源とし中部高地型櫛描文を共有する兄弟様式で、墓に鉄剣、螺旋状鉄釧、銅釧、ガラス玉等多くの威信財を持つことでも共通する。

長野県の北信から東信上田地域、群馬県の北部（渋川市周辺）は北陸系土器が多くみつかれる地域でもあり、威信財が日本海側からもたらされた証拠のひとつとなっている。威信財は群馬県北部から荒川を南下して東京湾沿岸へもたらされたと考える意見も多いが、平林大樹は帯金幅等の相違から東京湾沿岸と長野・群馬で出土する鉄釧は生産地が異なることを指摘する。とはいえ日本海から太平洋側へ連なる威信財伝播の基幹ルートの中継点にあたる箱清水・樽土器様式圏が、東日本の弥生時代後期社会の鉄などの普及に重要な役割を果たしていた可能性は高い。

佐久考古通信

■ 遺跡と考古学を学ぶためのコミュニケーション誌 ■

2016. 6. 18

佐久考古学会

■ 特集：佐久の弥生後期 — 広域交流の始まり —

紀元2世紀頃、古墳時代が近づくと朝鮮半島起源と目される鉄剣やガラス製品等の威信財や鉄素材が中央高地、関東などに普及する。

本号では弥生後期の佐久を含む長野や群馬にこれらの財が多いことに注目した。また、茨城県の鈴木氏には、弥生時代に遠方から佐久の地へ足を運んだ旅人の役割について追求していただいた。

★ 目 次 ★

| | | |
|----------------------|------|----|
| 箱清水と樽への文物の往来…………… | 小山岳夫 | 1 |
| くろがねの腕輪と碧い玉…………… | 平林大樹 | 2 |
| ウェスト・パイ・サウスウェスト…………… | 鈴木素行 | 6 |
| 偶感・弥生土偶…………… | 桐原 健 | 10 |

一方で、長野県佐久地域、群馬県南西部の甘楽・富岡地域、吉ヶ谷式土器様式圏の埼玉県比企・入間地域など北信、群馬県北部よりも南側に連なる地域は、北陸系土器は稀有で威信財を保有する地域である。これらの地域では、北信や東京湾沿岸などにもたらされた威信財のみを交換財として選択しており、北陸系土器を伴う人々は到来しなかった（あるいはさせなかった）ようだ。

今までは、有馬遺跡や小八木志志貝戸遺跡など群馬県だけでみつけていた人形土器が、近年佐久市西一里塚遺跡で発見され、千曲川流域での存在が確認された。鉄剣や鉄釧を副葬した墓域と近接して出土している点で有馬遺跡と共通し、威信財と人形土器は一体をなす可能性が高まった。

設楽博己は人形土器の両手を振り上げる仕草を墓に寄り来る邪悪なものを防ぐ行為と見る。また、古代中国の『周礼』に登場する墓に入って戈を振り悪霊を退散させる儀式を司った方相氏の影響を想定する。

威信財やその素材の到来元と考えられる日本海側の北方には朝鮮半島・中国大陸、西方には九州がある。半島・大陸の葬送儀礼などの思想・風習が、弥生時代の長野・群馬へ直接的であれ間接的であれ、伝わって来たとしても不思議でない。

くろがねの腕輪と碧い玉

平林 大樹

はじめに

標題に示した「くろがねの腕輪」と「碧い玉」とは、弥生時代後期の中部高地や関東地域に偏在が認められる器物である鉄釧とガラス小玉を指す。とりわけ前者については、該期における信濃への豊富な鉄器の流入を物語る資料としてくり返し言及がなされてきた。近年では、新出資料の増加とともに、歴史的評価をすすめるうえで不可欠な、資料そのものの詳細な観察に基づく実証的な研究も進展しつつある。

以上の認識を踏まえて、本稿では、鉄釧を中心に現在の研究状況を概観し、若干の私見を述べたい。

1. 鉄釧の分析視角

研究史 鉄釧に関する論考の多くは、出土遺跡の報告書のなかにおいて、付帯する論考というかたちで言及、検討がされることが多い（岩本1997等）。こうした中で、総合的な検討は、藤岡孝司による分析が嚆矢といえる（藤岡1995）。その後、出土事例の増加にともない、牛山英昭による、精緻な実測図の提示（牛山1996・1998）や、付着物の検討など、あらたな分析視角が付加され、多様な分類案も提示されてきた。岩本崇の論考は、こうした論点を明瞭に整理しており、現在における研究の到達点と評価しうる（岩本2002）。

近年では、土屋亮介が、製作技法に着目した分析を精力的にすすめており、注目される（土屋2009）。また、墳墓での供伴事例が多い銅釧との関係や巻き上げ段数や幅の違いと流通のあり方に着目した研究も多い（野澤2002・北條2005等）。

鉄釧の分類 上述のとおり、細部に分類の違いはあるものの、分類案において共通して提示される属性は以下のとおりである。

- ①線の幅
- ②鉄線（鉄帯）の巻き上げ段数
- ③断面形状

従前の研究を整理するならば、線幅は4mm程を境界として幅の狭いものと、広いものとに大別しうる。また、巻き上げ段数が数段以上にわたる個体を「螺旋状」、1～2段程度の個体を「带状」ないし「単環状」とする名称が周知されている。

筆者がこの中で、規定的な属性と認識しているのは

①・②である。とりわけ①の線幅は、これまでの研究で、地域的な偏在が明らかになっており、論を先取りすれば、幅の狭い鉄釧が長野地域の北部（以下、長野地域）に集中することが判明している。

ただし、鉄釧は、構造上、端部に近いほど線幅を減じており、計測者によって、計測位置に差異が生じている可能性がある。こうした点を確認するため、主要な出土事例について、各個体における線幅の最大値と最小値、平均値の分布を図1に示した。計測値は、筆者が資料調査を実施し、あらためて計測した値と実測図から読み取った数値を併用する。こうしてみると、漸移的な部分はあるが、平均4～5mmを境に、細型と太型に区分でき、従前の分類案の妥当性が検証された。

以上の結果を踏まえ、本稿では、次章以降に行う分析の前提として、以下の大別分類案を提示する。

A類 線幅最大値が平均値が6mmに満たないもの

B類 線幅平均値が6mmを超えるもの

これまでの検討結果からA類についてはすべて螺旋状であり、問題はないが、B類については、図に示すように、10mmを超える一群が存在しており、線幅と段数からさらなる細別分類が可能である。

いずれにせよ、本稿での目的に照らすならば、上記の分類でひとまず所定の目的は達成しうる。

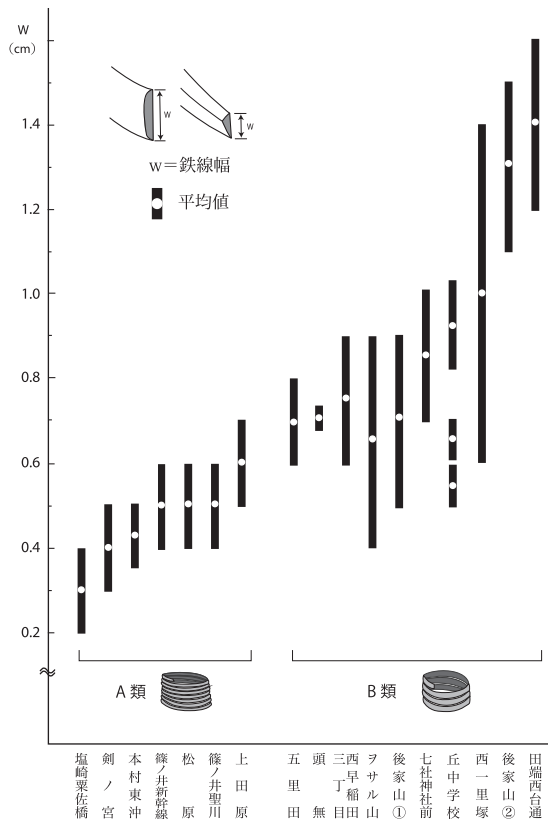


図1 鉄釧の鉄線幅

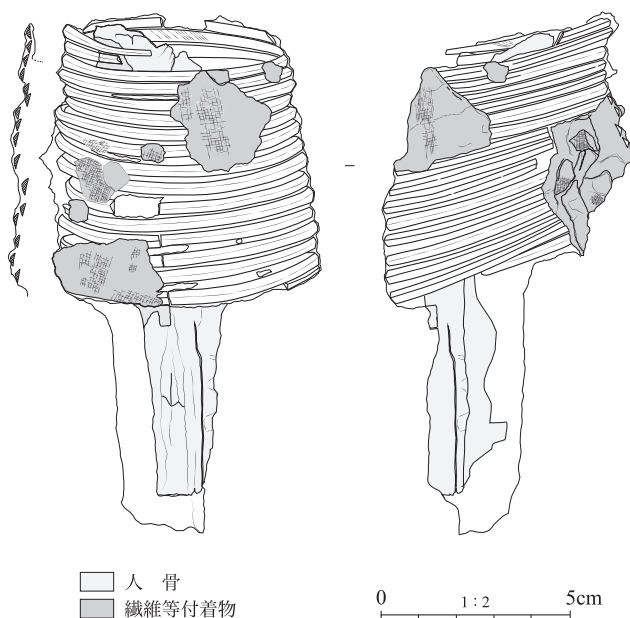


図2 塩崎遺跡群栗佐橋地点出土鉄釧実測図

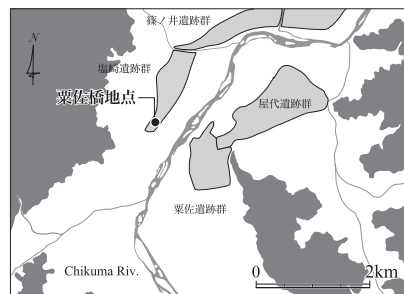


図3 出土地点の位置

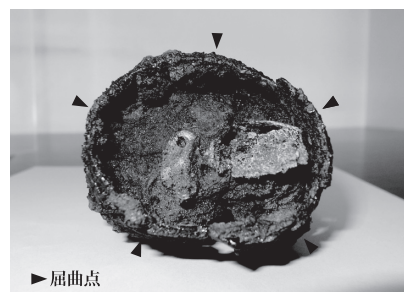


写真1 屈曲点の位置(端部側より撮影)

鉄釧の製作手順 ここでは、従前の研究成果と筆者の観察結果をもとに、想定しうる製作手順を以下に列記する。

- 工程① 長条鉄素材の用意
- 工程② 稜線の作出
- 工程③ 鉄線の巻き上げ
- 工程④ 細部・先端部の整形・調整

工程①については、後述する塩崎遺跡群栗佐橋地点出土例では、総延長が3mに及ぶ。弥生時代においては、長条鉄素材の用意そのものが、当時としては、高度な技術であったと考えられる。佐久市後家山遺跡出土例の科学分析の結果によれば、同例は炭素の含有量が少ない極軟鋼であるという。他の事例においても、同程度の軟度であったことが確かであれば、整然とした巻き上げも納得がいく。

工程②は、鍛打と研磨によって、断面形状を三角形に成形し、稜線を作成する工程である。この稜線が、とりわけ幅が狭い個体にみられる点は注目し値しよう。筆者は金属工学に明るいわけではなく、軽々に論ずることは避けたいが、単に意匠状の作出によるものではなく、螺旋の巻き上げ時に金属疲労による破断を防止するための措置として解釈するのが妥当とみる。この立場に立って、当該工程に位置づけたものである。

工程③は、鉄線を折り曲げ、単環ないしは螺旋を作成する工程である。明瞭の度合いに差はあるものの、ほとんどの螺旋状鉄釧では屈曲点が確認できる。さらに、いずれの個体も外径にかかわらず、屈曲の単位が3cm前後である点は注目できる。

東京都西早稲田三丁目遺跡出土例(岩本1997)では折り曲げ痕が極めて明瞭であり、多角形と呼称しても差し支えない形状を呈している。3cmという値は、軟質な長条形の鉄素材を折り曲げるにあたり、円形を損ねず、整然と多段の螺旋を巻き上げるのにもっとも都合のよい長さであったと想定される。

ただし、熱間鍛造と冷間鍛造のどちらの手法で形成されたのかは不明である。先述の通り、極軟鋼であれば、後者による巻き上げも不可能ではない。鉄釧の多くが内径6cm前後を測り、成人女性・男性は脱着が困難である。幼年時からの装着が想定されるが、折り曲げに木型などが用いられたのであろうか。

2. 塩崎遺跡群栗佐橋地点の鉄釧

ここで、A類の良好な出土例である長野市塩崎遺跡群栗佐橋地点出土例を提示し、観察所見を提示しておきたい(図2・図3)。同例は、ほぼ完形の鉄釧で、2基が並列する木棺墓から出土した。環内には人骨も残存しており、良好な遺存状態にある。各部位の名称については、出土位置を正位置と措置し、図化をすすめた。ここでは便宜的に、左右の方向は実測図の上面にむかって右、左を示し、鉄線の段番号については基部側より第1段、第2段…と呼び分ける。

出土状況 木棺痕跡をもつ土壇隅において棺床の直上で出土し、釧内部には桡、尺骨が残存していた。頭骸骨をはじめとする他の遺存人骨との位置関係からみて、右手首に装着されていたことは間違いない。人骨が遺存した状態での鉄釧の出土例は本例が唯一であり、

位置等から装着状況を実証できる重要な資料といえる。

外形 総段数は16段を数える。基部から端部に進むに従い、序々に径を減じており、裁頭円錐形をなす。上面は第15段と第16段の一部が欠損しているものの、端部側の先端部分は残存している。数カ所の破断が認められるが、概して遺存状況は良好である。螺旋の断面形状は楕円形をなすが、これは土圧による影響を受けた結果であり、もともとは正円に近い形状であったものと推察される。

螺旋の構造 鉄線は基部から端部に向かって左巻きをなし、螺旋を形成する。鉄線相互の間隔は0.1cm～0.2cm程を測り、一部には重複する箇所も確認できる。

鉄線の形状 鉄線は先端部では線幅0.2cm、線厚0.1cm前後、基部付近では同幅0.4cm、同厚0.2cm前後を測る。基部から先端部に向かうに従い、漸移的に細くなっており、先端部は尖頭状に仕上げられている。本例については銹膨れにより稜線が判然としないものの、破断面の肉眼観察およびX線写真の判読結果から三角形と判断した。

鉄線の折り曲げ 基部側の側面を観察すると、数ヶ所に鉄線が屈曲する箇所が認められる（写真1）。屈曲点は、一巻きにつきおよそ5～6箇所、おおむね3cm前後の間隔で認められる。さきに述べたように、土圧によって断面形状が変形しており、この屈曲点も変形過程において偶発的に生じた可能性も否定できない。ただ、屈曲点は下面においても一定の間隔で確認でき、上方からの土圧の影響を想定した場合、変形方向として不自然である。この点を考慮するならば、本例に関しては、ひとまず土圧による変形の可能性を低く見積もることができる。

付着繊維 外面上面の中央右上から左下隅にかけて3cm前後、下面においては破断部を中心に繊維の付着が認められる。とくにこちらについては二重に重なっている箇所がある。繊維痕の細部を観察すると、糸の直径は0.03～0.04cmを測り、撚りはS撚りの可能性がある。現状では、繊維同定を果たし得ていない。この繊維については①被葬者の衣服、②遺骸の緊縛布、③単独埋納時の包装布（袋）、④鉄釧の保護のための織布といった解釈を想定しうるが、本例については、装着状態での出土であることや、繊維が外面にのみ付着していることから、①ないしは②であることは確実である。また、第16段の内面にも、わずかながら繊維痕跡が確認できる。これは岩本崇が指摘する「繊維圧痕A」に該当する（岩本2002）。

岩本は、墳墓出土資料からしか確認できず、出土地域も南関東に限定されると述べているが、この指摘が確かであれば、中部高地において初の事例となる。

3. 鉄釧の分布と流通

図4に、A類とB類の分布を示した。この図からただちにわかるのは、両者における排他的な分布のありかたである。中部高地と関東に偏在することは従前の研究の中で繰り返し指摘されてきた事象であり、長野地域においてA類が偏在する事実をここでも追認することができた。

こうした分布の偏在には、下記の解釈が成り立つ。

①中部高地で2種類の鉄釧が作り分けられ、関東地域に「流通」した。

②関東地域で2種類の鉄釧が作り分けられ、中部高地に流通した。

③両者がそれぞれの地域で生産された。

分布論の原則から考えれば、③がもっとも妥当性が高く、明らかに形態の異なる二者は、中部高地と関東各々の地域で生産していたと考えるのが自然であろう。

一部の事例を除き、長野地域に主たる分布が限定されるA類については、地域生産が確実視でき、地理的な位置関係と北陸系土器の出土を考え合わせれば、日本海ルートを経由して鉄素材を入手している可能性を高く見積もることができる。

当時稀少であった鉄製品を惜しみなく副葬する当地の習俗は、豊富な鉄の流入を示す証左といえよう。

一方、B類については、広範に分布している点を考慮すれば、東京湾沿岸の遺跡に製作地があり、そこから遠隔地に再分配されたという、高次の理論を提示することも可能である。なお、同じ箱清水式文化圏である佐久地域で、B類に出土が限られる点は興味深い。関東地域に接する地理的環境を勘案すれば、同地域から流入されたとみるべきであろうか。

いずれの仮説も、究極的には、製作工場の発見という偶発的状況に遭遇しない限り、さらなる検証は難しいが、こうした鉄釧の分布状況の分析からは、在地における生産・消費を基盤としながら、一部、広域的な流通を複線的に行い得ていた地域社会の姿を読み取ることができる。

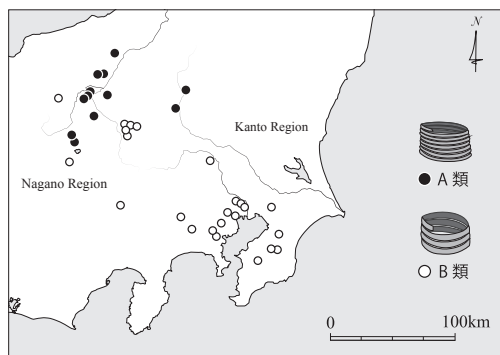


図4 鉄釧の分布

4. ガラス玉と屋内墓

筆者はかつて、床面から265点を超えるガラス玉が出土した長野市長野女子高校校庭遺跡16号住居跡（図4）について、長野市榎田遺跡と中野市牛出古窯遺跡における住居跡内からの玉類や人骨の出土例を類例として示し、出土遺構に対する出土点数の特殊性から堅穴住居跡が墓として利用され、ガラス小玉が被葬者の装身具として副葬された可能性を提示した（飯島他2014）。

こうした住居内に埋葬される事例に関して、鈴木素行は、住居跡内に墓坑の痕跡が確認できるものを「屋内土墳墓」、痕跡は認められないが、炭化物や鉄剣、ガラス玉など出土から、埋葬の可能性を認めうる事例を「屋内墓」とする説を提示した（鈴木2008）。

長野女子高校校庭遺跡の事例は、炭化物の出土こそ確認できなかったものの、ガラス玉は、住居跡の西側、床面直上からまとまって出土している。こうした状況は、提示された後者の概念に合致しており、「屋内墓」の一例と解することができる。

千曲川流域では、鉄釧やガラス玉を副葬にもつ円形周溝墓が、「赤い土器のクニ」と形容される地域社会の墓制として定見を得てきた。上述の想定が確かであれば、これまで、混入や祭祀に関わる事例として等閑に付されてきた事例も「屋内墓」の可能性が生じてくる。

これらは、該期の信濃における墓制の評価に関わる論点であり、状況証拠の積み重ねという点は論拠として脆弱である。慎重な検討と類例の検索が重要となる。

結 語—分布論のケーススタディー—

最後に、方法論的な観点から、二つの器物がもつ可能性について言及しておきたい。小杉康は、「分布論は体系化されていない」との批判を受けるかたちで、「遺跡間での広がり」を問題とするものとしての分布論

を構想すべき」としている（小杉2011）。分布図における空白域の取り扱いなど留意すべき問題は内包されているが、分布のあり方の比較は、現状では、生産や流通を考える有効な手法である。地形的な制約をもつ中部高地と、相互往来が容易な関東諸地域に出土する二つの器物は、考古学的方法である分布論の体系化をすすめる上で、良好なケーススタディと評価しうる。

以上、新たな知見のほとんどない本稿の不備を今後の課題として、筆を擱くことにしたい。

謝 辞

本稿は、筆者が長野市埋蔵文化財センター在職時に、塩崎遺跡群栗佐橋地点出土例を実測する機会に恵まれたことに端を発する。同例の重要性こそ認識していたものの、新たな論点や属性を見出せなかったため、論考として提示する機会もなく、忘却しかけていたが、このたび、小山岳夫氏に執筆を勧めていただいた。

また、塩崎遺跡群栗佐橋地点出土例の提示にあたっては、長野市埋蔵文化財センターの飯島哲也氏に、ご高配を賜った。文末であるが記して両者に感謝の意を申し上げたい。なお、同資料は、現在、長野市立博物館の常設展示室で展示されている。

参考文献

- 飯島哲也他 2014『長野女子高校校庭遺跡』長野市の埋蔵文化財第134集、長野市教育委員会。
- 岩本 崇 1997「西早稲田3丁目遺跡出土の鉄釧」『西早稲田3丁目遺跡』、西早稲田3丁目遺跡調査会。
- 岩本 崇 2002「東日本における弥生時代鉄釧の製作背景」『古代文化』第54巻第5号、古代学協会。
- 牛山英昭 1996「弥生時代鉄釧の一例」『考古学雑誌』第81巻第2号、日本考古学会。
- 牛山英昭 1998「七社神社前遺跡出土の鉄釧」『七社神社前遺跡Ⅱ』、北区教育委員会。
- 小杉 康 2011「第4章空間をよむ」『はじめて学ぶ考古学』有斐閣アルマ、有斐閣。
- 鈴木素行 2008「屋内土墳墓」からの展望—弥生時代後期「十王台式」の埋葬を考えながら—『地域と文化の考古学Ⅱ』、明治大学考古学研究室。
- 土屋了介 2009「螺旋状鉄釧の基礎的研究—形態と数量的要素を中心に—」『日々の考古学』2、東海大学考古学研究室。
- 野澤誠一 2002「鉄釧・銅釧からみた東日本の弥生社会」『長野県立歴史館研究紀要』第8号、長野県立歴史館。
- 藤岡孝司 1995「螺旋状鉄釧小考—東日本における腕輪の意味」『研究紀要』16、千葉県文化財センター。
- 北條芳隆 2005「螺旋状鉄釧と带状鉄釧」『待兼山論集—都出比呂志先生退任記念—』、大阪大学考古学研究室。

図版出典

図1・3・4：筆者作成 図2：長野市教育委員会所蔵資料を筆者実測、トレース 図5：飯島他2014より転載、一部改変 写真1 筆者撮影

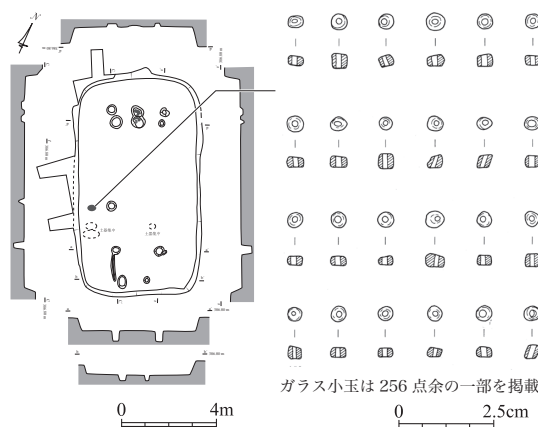


図5 長野市長野女子高校校庭遺跡16号住居跡

ウェスト・バイ・サウスウェスト

鈴木素行

1. 「十王台式」の故地

関東地方を南北で区分すれば北関東、東西で区分すれば東関東、太平洋に面して茨城県がある。弥生時代の後期後半、その茨城県の北部地域に「十王台式」と呼ばれる土器群が成立した。胴上部に縦区画された櫛描波状文と、胴下部に付加条第2種の羽状縄文を特徴とする型式である。同じく「十王台式」であっても、久慈川流域以北と那珂川流域以南とでは、土器群に異なる属性が見出せる。特に「十王台式3・4期」には、胴上部櫛描文の区画文が分別の指標となる。久慈川流域の「小祝式」は、縦区画が2条で横区画が直状文と連弧文を、那珂川流域の「武田式」は、縦区画が3条で横区画が波状文を、それぞれ典型とする（図1）。底面の痕跡は、「小祝式」が砂粒を付着させたままの砂痕や調整痕であるのに対して、「武田式」は布目痕。「小祝式」の胎土には、多賀山地の地質を反映して金雲母（風化した黒雲母）が多量に含まれることも、製作地域の識別に有効である。

長野県佐久市西一本柳遺跡（上原2005）のH1号住居址から、「箱清水式」に伴い「十王台式」が出土した（図5-1）。煮沸具に使用された中・小型壺形土器で、胴上部櫛描文の部分的な破片である。縦区画が2条であること、胎土に多量の金雲母を含むことから、久慈川流域で製作された「十王台式」と判断された。この破片には時期を細別する表徴を欠くものの、「十王台式」と「樽式」の並行関係から「十王台式2期」もしくは「3期」、「箱清水式」の細別（小山1999）も参考にすれば「十王台式3期」の「小祝式糠塚段階」では

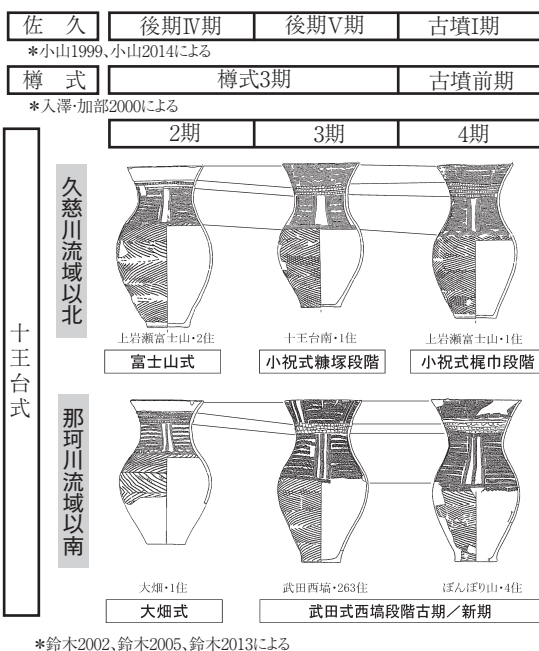


図1 「十王台式」の細別と並行関係

なかったかと推測している。

2. 「十王台式」から「箱清水式」への経路

他地域への「十王台式」の分布を概観すると、南方の茨城県南部から千葉県域へは、「香取の海」とも呼ばれた古鬼怒湾の沿岸に遺跡が広く拡散するのに対して、西方向の栃木・群馬県域へは、あたかも蟻の行列のように、遺跡が連なることに気付く（図2）。これは、「樽式」を目的地に「十王台式」が辿った経路ではなかろうか。久慈川流域からは、那珂川を渡り十万原遺跡群（二の沢B遺跡他）を経て、大戸遺跡群（大畑・大戸下郷遺跡他）に至る。ここが南方向と西方向の分岐点。西方向へは、八溝山地の南端を越えて「二軒屋式」の地域に入る。栃木県の宇都宮市周辺から、筑波山を東に眺めつつ、思川沿いを南下して小山市周

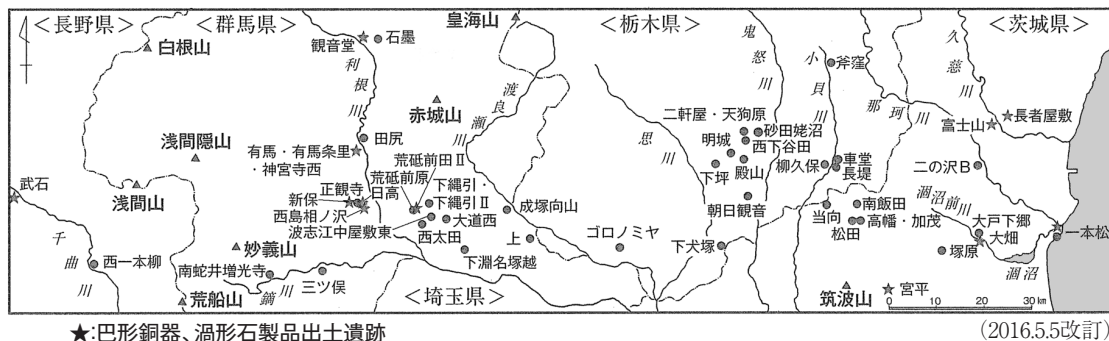
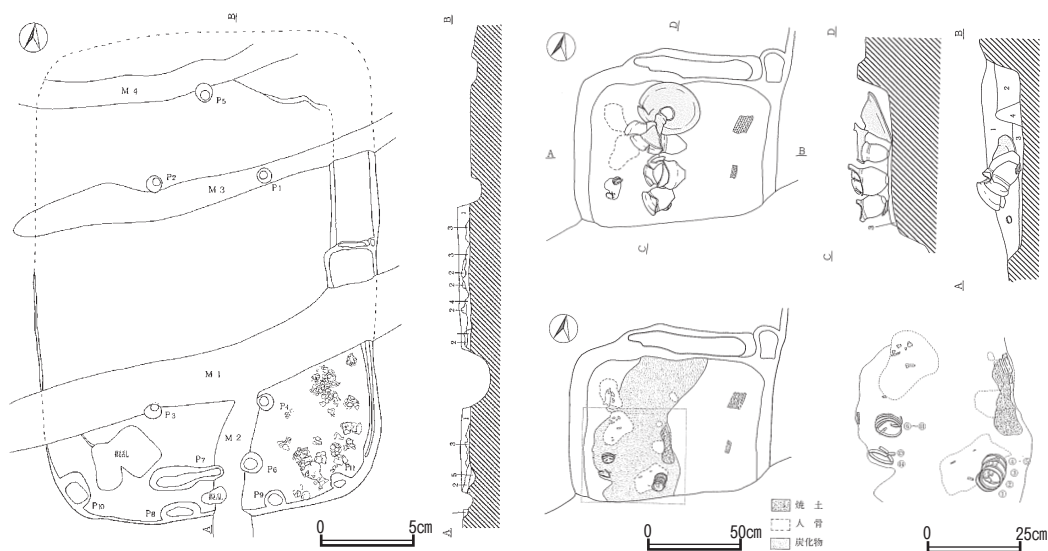
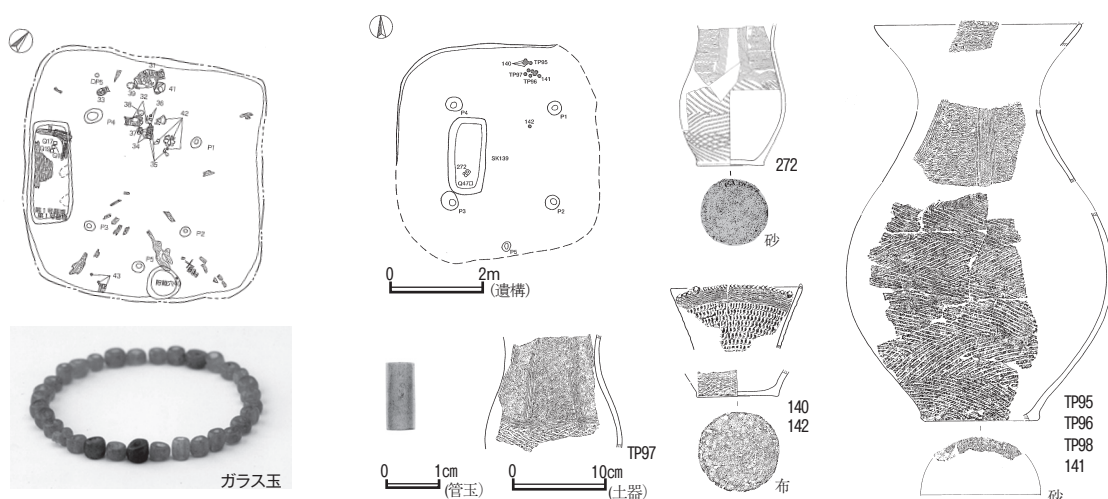


図2 西南西に進路を取る「十王台式」の分布



1. 長野県佐久市上直路遺跡(林1998)



2. 茨城県茨城町大戸下郷遺跡(近藤2004)

3. 茨城県水戸市二の沢B遺跡(江幡ほか2003)

図4 「箱清水式」と「十王台式」の「屋内土墳墓」

この類例となり得る唯一の事例が、佐久市上直路遺跡(林1998)の第1号住居跡であった。長軸10m前後と竪穴の規模は異なるが、壁際の床面に土墳墓が掘り込まれており、炉址が検出されず、多数の土器が据え置かれていたこと、さらに竪穴と土墳の覆土中に火事の痕跡を残すことも共通している。副葬品に銅釧があり、おそらくは靑銅の抗菌力が装着部の前腕骨を保存させた。人骨の検出が埋葬施設と確定させるとともに、その観察の所見により、火事は、遺骸の腐敗が進行して骨化した後のことと位置付けられた事例である。

上直路遺跡第1号住居跡の「箱清水式」は、「後期Ⅲ期」であり、「十王台式5期」の「屋内土墳墓」とは同時期でも相前後する時期でもない。同じような埋葬施設を構築することには共通する条件があったこと

を予想していたが、長野市長野女子高校校庭遺跡の16号住居跡では、火事の痕跡がある住居跡の床面から265点ものガラス玉が出土し、人骨も検出された中野市牛出古窯遺跡や長野市榎田遺跡を含めて、住居を埋葬施設に転化したと考えられる事例を知ることができた(柳生ほか2014)。これは「十王台式」に推定した「屋内墓」そのものであり、彼我の地域に「屋内土墳墓」を成立させた共通の基盤ということになるのであろう。

「十王台式」の「屋内土墳墓」の副葬品は専ら玉類であり、「屋内墓」と推定する一本松遺跡の第Ⅰ調査区第53号住居跡には、件の巴形銅器が検出されている。方形周溝墓の副葬品には稀でない鉄剣や鉄鏃などの武器が欠落すること、これを「十王台式」の大きな特徴として捉えておきたい。

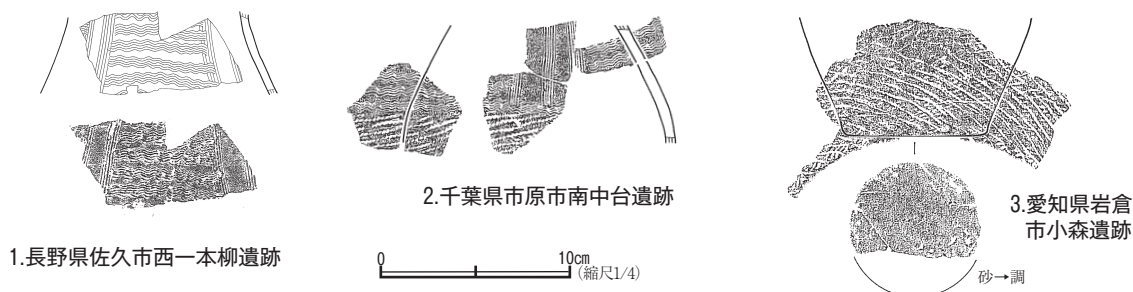


図5 遠距離を移動した十王台式土器

5. 鉄器と織布の交換と流通

茨城県域においても弥生時代後期になると、工具や農具の石器群が極端に少なくなる。遺物としてはほとんど検出されなくても、工具の鉄器化と、これを用いた木器の生産を考えるべきなのであろう。「十王台式5期」に至るまで僅かながらも石斧が残るのは、鉄器の供給が安定したものではなかったことによるのであり、鉄器の入手は、他地域との交渉に頼らざるを得なかった。「箱清水式」「樽式」へと向かった「十王台式」の動機も、ここにあったに違いない。ただ、「十王台式」の交渉は、西方向への一途とは限らないことから、検出された個々の鉄器について「箱清水式」「樽式」との交渉とは断定できないだけである。長野・群馬県域から検出される鉄器は、茨城県域とは比較にならない質量を示している。佐久においても、北一本柳遺跡の板状鉄斧をはじめとして、剣・鏃・釧・斧・鎌・刀子などの種類が見られる（富沢2014）。このうち「十王台式」が目的としたのは、剣・鏃・釧の威信財ではなく、斧・鎌・刀子の生存財であった。巴形銅器や渦形石製品は、これに付随してもたらされることになったのであろう。

贈与であり、その返礼という形であったとしても、鉄器との交換財として準備されたのは、おそらく織布であった。「十王台式」には、少なからず土製紡錘車が伴う。織布の軽量は、陸路の長距離を運搬するのにも適している。道中に携帯した炊事具の土器が訪れた地域に残されることもあった。しかしなによりも、交渉の地域である「箱清水式」「樽式」に届けたのは、流通に伴う利潤ではなかったかと想像を巡らしている。

6. 東山道の行先

茨城県南部を経て千葉県の東京湾沿岸域にある市原市南中台遺跡まで到達した「十王台式」は、那珂川流域の「武田式」であった（図5-2）。これも煮沸具の中・小型壺形土器で、櫛描文は、縦区画が3条、横区画が波状文、胎土に金雲母は認められない。現在のところ、経路が推定できる南方向の終着点である。

一方、遙か遠く愛知県の岩倉市小森遺跡に、「十王台式」が知られている（鈴木正博1988）。20区から出土した底部破片（図5-3）と、19区の胴部破片3点は同一のものらしく（早野2002）、やはりこれも煮沸具の中・小型壺形土器が1個体である。底面は一部に砂痕を残した調整痕で、胎土には金雲母を多量に含む。付加条第2種の軸縄の圧痕が明瞭なもの、久慈川流域で製作された「十王台式」の特徴を示している。時期を細別する表徴を欠くが、「十王台式3期」の「小祝式糠塚段階」あたりという印象であった。小森遺跡からは、「箱清水式」の甕・壺・高環形土器の複数個体が出土している。長野県域へと進入した「十王台式」と故地が一致し、時期も符号することから、この「十王台式」は、陸路を「箱清水式」に同行したものであろう。「箱清水式」の交渉も、北陸地方との一途ではなかった。北方向は、金属器とともにイモガイ製品、さらには翡翠への進路であり、南西方向は、金属器の中に巴形銅器が加わることになる進路であった。

東山道と呼ばれることになる陸路沿いの遺跡で「十王台式」が出土したら、連絡をいただきたい。高速道路を利用し、当時の経路をなぞるようにして駆け着けたいと思う。

謝辞 資料の観察でお世話をいただいた黒沢 浩氏・須藤隆司氏・村木 誠氏、執筆をお誘いいただいた小山岳夫氏に感謝いたします。

参考文献 富沢一明 2014「佐久地域における弥生時代の出土金属製品について」『佐久考古通信』113、4-6頁／早野浩二 2002「愛知県岩倉市小森遺跡の再評価」『考古学フォーラム』15、29-48頁／柳生俊樹ほか 2014『浅川扇状地遺跡群 長野女子高校校庭遺跡』長野市教育委員会

* 本稿は、鈴木素行 2008「『屋内土壙墓』からの眺望」『地域と文化の考古学』Ⅱ、443-458頁／2011「富士山のイモガイ」『茨城県考古学協会誌』第23号、17-38頁／2012「『十王台式』、西へ（上）」『茨城県考古学協会誌』第24号、45-63頁 等から抜粋して加筆構成した。参考文献と各事例の詳細については、これらを参照されたい。

偶感・弥生土偶

桐原 健

人面意匠の遺物には心惹かれるものがあり殊に資料の少ない弥生にあっては尚更である。

佐久・西一里塚の人形土器が報ぜられたのは平成22年で以来早くも6年が過ぎた。土器は破碎の状態での発見で頭部の出土は平成16、左腕は17年、胴部の破片は整理作業中に見つかっている。報告書によるとこの他に顔面部の破片2点が出土している。

人形土器は高さ28cm、正面に人面を作出。瓢形の上胴部には左腕が付す。右腕は欠損しているがおそらくは両手を延ばすポーズをとるかと思われる。頭部は中実、顔面・胴部は中空、胸部に開孔がある。顔面表現は面長、耳朶は大きい匙状で右耳朶に穿孔、鼻筋通り鼻梁高し、口蓋裂表現、頭部を含め全身に赤色塗布。

顔面破片は右半分、頭部は中空、後頭部に開口部がある。耳朶に2ヶの穿孔、黥面表現なし、全面塗彩。

佐久平を流れて千曲川に注ぐ湯川の左岸には弥生中期末の大集落が形成されているが後期に入るとそのうちの西一里塚地籍は墓域となっている。中部横断面による調査域の西縁は墓域の西縁でもあって数条の溝が南北に走っており、2点の人形土器は北半1・2区の溝50mの範囲内より出土している。

調査域の北半からは竪穴住居3軒、方形周溝墓3、円形周溝墓15、木棺墓2、土器棺墓6基が検出されている。小判形の竪穴住居は円形周溝墓を切っているかに見えるが新旧関係は把めていない。出土土器は中期後半とされる。方形周溝墓は中期後半から後期にかけて、円形周溝墓は後期。木棺墓、土器棺墓も後期とされる。

墓域の南限を画す溝(SD15)の上層に5基の土器棺墓が設けられていて、11点の壺が図示されている。多くは口頸を欠くが推定器高50から60cmの大形品で朝顔形の口縁と無花果形の胴部が特徴を為す。頸部には櫛描きの直線・波状・丁字状、線描きによる羽状文が繞る⁽¹⁾。以上は佐久平弥生後期のⅢ期古・新に当り長野地区の箱清水Ⅱ期2に相当する。

希少な資料を得たことにより東日本弥生土偶考究の波は昂まった。筆者も驥尾に付して拙論を述べる。

顔面が表示されている縄文の造形の一つに土偶があり、性格・用途・変遷について今迄に幾多の考究が為されており、そのなかに前期の板状土偶が自立するのが中期だとする説がある。縄文のヴィーナスは両手を左右に延ばしている。やがて両手は斜め上に挙がって万歳型^{マンザイ}を取り、中期後半に下ると肩を嚇らせて両手を

垂らす。このポーズは後期・晩期にまで続く。

後期に入ると中空の大型土偶が出現、女性表徴の乳房は縮小をはじめめる。

出土状態について、中期までの土偶は毀された上で廃棄されているが例外もあって縄文のヴィーナスは埋葬姿勢で発見されており、後期初頭の仮面の女神は墓墳の一隅に更にピットを穿って納められ被葬者に伴っていたことが確認できた⁽²⁾。資料は乏しいがある種の土偶は葬に係っている。

縄文晩期末に続く弥生前期から中期初頭の東海・中部高地・北関東の域内には黥面を特徴とする土偶が生起・繁衍している(第1図、第1表)⁽³⁾。黥面土偶の特徴はスカート状に広がる腰部を底とする中空の座像で両手は垂下している。愛知・古井⁽⁴⁾、神奈川・中屋敷⁽⁵⁾、山梨・坂井⁽⁵⁾、同・岡1・2⁽⁶⁾、長野・腰越1・2⁽⁷⁾、同・下境沢⁽⁸⁾、顔面を欠く長野・海戸⁽⁹⁾、新潟・村尻⁽¹⁰⁾、の10点が代表例として挙げられている。このうち縄文土偶からの系譜を引く部位は乳房と両手垂下の形状で、前者は頭部を欠く腰越の2点と中屋敷、後者は10例総て、又、一部の遮光器土偶や山梨・金生の異形土偶⁽¹¹⁾を仲介にすれば黥面8例の頭部開口は縄文に繋がる。

土器の口縁に人面を付した例に茨城・女方11号土壙⁽¹²⁾、栃木・野沢⁽¹²⁾、愛知・市場⁽¹²⁾、福島・滝の森⁽¹³⁾、茨城・小野天神前⁽¹⁴⁾、神奈川・上ノ台⁽¹⁵⁾の6例を挙げた。女方の長胴甕以外は細口長頸の壺形土器で上ノ台以外の顔面特徴は両眼と口辺に三角形の隈取りが為されていることにある。これは黥面とは異なる。

甕・壺である以上土偶の範疇には入らないが中空の容器という面からすれば中空、頭部開口の黥面土偶に通ずるものがある。

腰越の2体は平石を箱状に組んだ中に並列していたとあり、岡の2体は灰・焼土の中に俯伏の呈を為して出土している。中屋敷と岡の2体の体中からは幼児骨と歯が検出されている。

女方の耳朶は三日月形の匙状で右耳朶には4ヶの小孔が穿たれている。匙状の張りは顎にも設けられていてこれは髭の表現かもしれない。鼻梁は黥面のそれよりは高い。胴部で為す甕に乳房・両腕の造形はない。

女方遺跡は20m四方の小範囲に40余の土坑が穿たれ235点の土器が出土していてこれは弥生中期前半の墓址群で11号土壙からは人面付土器の他に瓢形土器1、広口壺2が出土している。

黥面ではない土偶のグループは開口部の位置によって頭頂部とそれ以外の部位にあるものとの二種に分けられる。前者例は神奈川・上の台、千葉・三嶋台⁽¹⁶⁾、長野・西一本柳⁽¹⁶⁾の3例で、三嶋台は中期後半の宮ノ台期で左腕が付されている。上の台は後期・弥生町期の壺で胴部に羽状縄文帯、頸部に小円板の貼付帯が

繞る。口頸部は塊状に膨らみ顔面表現、穿孔ある三日月形の耳朵、鼻梁高し。楕円形ピットから出土している。西一本柳は顔面部破片、中期後半の所産とされる。

後者の群馬渋川・有馬⁽¹⁶⁾、同高崎・小八木志志貝戸⁽¹⁷⁾が口腔、長野佐久、西一里塚が胸部に開口部が設けられている。有馬例は弥生後期とされる磯床墓群（sk402の南に接する）中に伏された状態で発見。土器は高さ36.5cm、頭部には1条の帯が繞る。両耳は大きい半月形で鼻梁は高く、部厚い口唇が付されている。胴部は中空で飽磨き斜めに挙げている右腕が付く。

小八木志志貝戸例は20数基の土器棺墓から成る墓域の西縁壕中より破片の状態で発見された。壕の生起・廃棄は弥生後期後半とされている。器高は27cm。頭頂はやや平坦、鼻梁は高く大きく鼻腔2孔を表現、頭部から頬にかけての半月状大耳には穿孔1ヶ、目は円く上瞼が脹れている。胴部は全面塗彩、腕は無し。西一里塚例については既述した。

女方⁽¹²⁾と神奈川・ひる畑例⁽¹⁸⁾は頭部破片。円頭、顔面素文の中空なので開口部は胴部にある筈、女方例は16号土坑の東寄りから出土、ひる畑遺跡は中期後半の宮の台期で住居址からの出土と推測されている。

頭頂開口の系譜をとる西一本柳例の頭部を繞る隆帯は有馬のそれと似通っている。腕が付された三嶋台例は人面付壺形土器との仲介を為す。5例に見られた馬の目隠しと表現された大きなスプーン状の耳朵は穿たれた複数の小孔と合せて女方の人面土器の特徴でもあるががかかる耳朵は既に腰越の

黥面に見られており、これが片山の挙手人面土師器に至る。

挙手人面土師器は昭和22年に発見、27年に報告された。出土地は長野県上高井郡保科村上和田片山（現長野市若穂町）で崖錐の中腹に長さ1m径60cmの柱状石が聳立。引き抜いたところこれに接して地下30cmの粘土中より挙手人面土師器1、小型丸底の埴2、高坪脚部3、器台1、大型粗文の壺3が1列に並んで出土。特別な遺構は無かった。

挙手人面土師器は正面性のある長胴の鉢で全面塗彩の痕が残る。口縁の左右より把手が突出、先端には五指を表す刻みがある。顔面は鉢体部上半正面で鼻梁は高く表現、両眼は横に細く、口は小さく器内に切り込んでいる。顔面の両側には2.8×5.2cmの大きな匙状の

第1表 東日本の弥生土偶

| 番号 | 遺跡名 | 県名 | 頭部・顔面 | | | | その他 | 器形 | 胴部 | | | | その他 | 遺跡の性格 | 遺構出土状態 | その他 | |
|----|--------|-----|-------|------|------|------|------|---------|-------|----|---|---|-----|-------|--------|------------|-------|
| | | | 頭頂開口 | 目口深取 | 耳孔深取 | 口眼のみ | | | 体部中空 | 乳母 | 胸 | 有 | | | | | 有 |
| 1 | 古井 | 愛知 | ○ | ○ | ○ | | | 土偶形容器 | ○ | ○ | | | | | | 単独出土 | |
| 2 | 中屋敷 | 神奈川 | ○ | ○ | ○ | | | 土偶形容器 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | 大塚内 | 幼児骨収納 |
| 3 | 坂井 | 山梨 | ○ | ○ | ○ | | | 土偶形容器 | ○ | | ○ | ○ | ○ | | | 灰・焼土中 | 幼児骨収納 |
| 4 | 岡(1) | 山梨 | ○ | ○ | ○ | | | 土偶形容器 | ○ | | ○ | ○ | ○ | | | 灰・焼土中 | 幼児骨収納 |
| 5 | 岡(2) | 山梨 | ○ | ○ | ○ | | | 土偶形容器 | ○ | | ○ | ○ | ○ | | | 灰・焼土中 | 幼児骨収納 |
| 6 | 腰越(1) | 長野 | ○ | ○ | ○ | | | 土偶形容器 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | 二体並列 | 字溝ノ上 |
| 7 | 腰越(2) | 長野 | ○ | ○ | ○ | | 頭部欠く | 土偶形容器 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | 土坑 | |
| 8 | 下堀沢 | 長野 | ○ | ○ | | | | 筒形 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | 土坑 | |
| 9 | 南戸 | 長野 | | | | | 頭部欠く | 土偶形容器 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | 土坑 | |
| 10 | 村灰 | 新潟 | | | | | | 頭部形成されず | 土偶形容器 | ○ | ○ | ○ | ○ | | | 土坑 | |
| 11 | 市場 | 愛知 | | | | | 口眼のみ | 土偶形容器 | ○ | | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 12 | 女方 | 茨城 | | | | | | 土偶形容器 | ○ | | ○ | ○ | ○ | | | 土器棺墓群 | 1号土坑 |
| 13 | 小野大神前 | 茨城 | | | | | | 壺 | ○ | | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 14 | 土の台 | 茨城 | | | | | | 壺 | ○ | | ○ | ○ | ○ | | | 横形印シロ | |
| 15 | 野井 | 栃木 | | | | | 口眼のみ | 土偶形容器 | ○ | | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 16 | 滝の森 | 福島 | | | | | | 壺 | ○ | | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 17 | ひる畑 | 神奈川 | | | | | 口眼のみ | 土偶形容器 | ○ | | ○ | ○ | ○ | | 壺形 | 惣穴住居内 | |
| 18 | 三嶋台 | 千葉 | | | | | 口眼のみ | 壺 | ○ | | ○ | ○ | ○ | | 壺形 | 環状墓 | |
| 19 | 西一本柳 | 長野 | ○ | ○ | ○ | ○ | 口眼のみ | 人形土器 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | 墓域 | 墓域西縁の遺土に埋す | |
| 20 | 西一里塚 | 長野 | ○ | ○ | ○ | ○ | 口眼のみ | 人形土器 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | 墓域 | 環状墓に埋す | |
| 21 | 女方 | 茨城 | | | | | | 人形土器 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | 壺形 | 土器棺墓 | |
| 22 | 有馬 | 群馬 | | | | | 口眼のみ | 人形土器 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | 壺形 | 土器棺墓 | |
| 23 | 小八木志志戸 | 群馬 | | | | | | 鉢形土器 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | 立柱石 | |
| 24 | 片山 | 長野 | | | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |

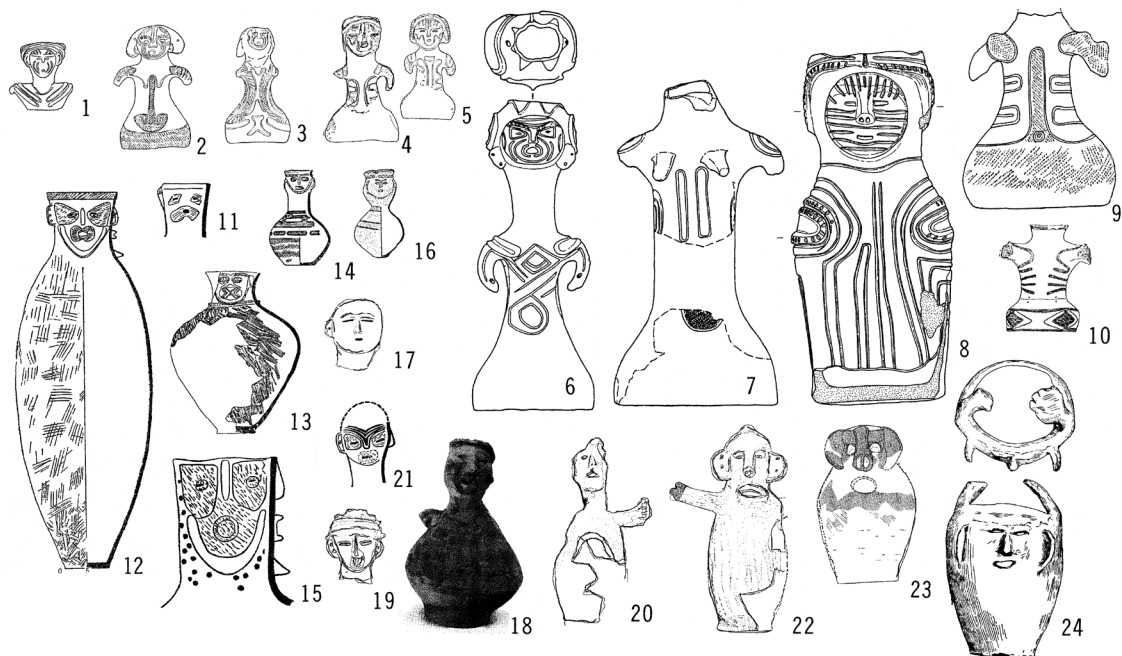


図1 東日本の弥生土偶

耳が付く。器高は前面が18、背部は低く9.2、口径は14×12cm。

小型丸底の1点は球形の体部に漏斗状の口頸が付く。全面塗彩、器高15.2、口径12cm。もう1点は球形の体部に口縁立ち上りの直立した頭部が付く。全面塗彩、器高・腹径12、口径8.8cm⁽¹⁹⁾。埴から窺える年代は4世紀を下らない。

縄文から弥生にかけて、中部高地の葬制だが縄文中期後半の長野明科・北村遺跡E地区での所見は1土壌に1遺体が仰臥屈葬の姿勢で葬られている。副葬品は無く、土壌上に特別な施設は設けられていない⁽²⁰⁾。

後期になると墓壇の被葬者顔面を鉢で覆うケースが現れる⁽²¹⁾。長野埴科・円光房遺跡⁽²²⁾では土壌上縁に配石を施し、標石を立てる等の行為が窺える。

後期後半から晩期に下る。希少例に過ぎないが土器棺の存在と土坑よりの火葬骨検出で再葬が行われていた。

再葬は死者の霊は骨に宿るとする観念により遺体の霊肉が分離した後、骨のみを改めて祀る葬法で霊肉分離を促進し清浄な骨を得る作業が火葬で、かかる葬制は後期後半の東海域で盛行している。

霊肉分離後の骨の扱いだが土器棺の容量、殊にも口頸径の狭さによる限り総ては拾骨されず再葬される骨は限られている。骨は死者の霊の憑代と観じた場合、再葬に当って骨の多寡は係りないだろう。それに、そして時間差の認められない土器棺墓群から拾骨、再葬の機会は多くなく、拾骨の対象は数代に亘っていたものとする。骨に憑く霊は個人のそれではなく祖霊であって祖霊を祀る観念は縄文後期後半の数体の骨を組んだ盤状集積⁽²³⁾までに溯る。

長い時間を推移してきた縄文土偶とは異なり時空の限られている弥生土偶は再葬・骨への異常な執心と係っている。筆者は骨は祖霊の憑代、弥生土偶は祖霊の表現と観る。その土偶の一部形状は縄文晩期・後期・中期後半の縄文土偶に辿り着く。

東日本の再葬墓は中期後半に消失し代って周溝墓が波及する。弥生土偶の消長も同じだが例外もある。埴や高坏、器台と共に柱状石の傍らに置かれた挙手人面土師器がそれに当る。

- 註1 a 長野県埋蔵文化財センター『濁り遺跡・久保田遺跡・西一里塚遺跡群』2012
註1 b 桜井秀雄「人形土器の研究」金沢大学考古学紀要36 2015
註2 土偶についての定義付は未だ定まっていない。ここではアバウトに縄文時代に人形・顔面を表現した土製品を縄文土偶、同じく弥生時代の人体・顔面を表わした土器・土製品を弥生土偶と規定する。
註3 a 荒巻実・設楽博己「有髻土偶小考」考古学雑誌71-1. 1985
註3 b 設楽博己「髻面の系譜」『氷遺跡発掘資料図譜』所収 1998
註4 岩野見司「三河国出土の土偶」考古学雑誌49-3 1963
註5 甲野勇「容器的特徴を有する特殊土偶」人類学雑誌54-12 1939
註6 山梨県八代町誌編集室『八代町誌』1917
註7 和田千吉「信濃国腰越発掘土偶」考古学雑誌8-3 1917
註8 設楽博己「下境沢遺跡出土の髻面付土器」『下境沢遺跡』所収 1998
註9 大野雲外「信濃国諏訪郡平野村小字小屋口発見石器時代土偶」東京人類学会雑誌20-226 1967
註10 石川日出志「村尻遺跡出土のヒト形土器」『村尻遺跡1』所収 1982
註11 新津健・八巻与志夫・山下孝司・奈良泰夫「ハヶ岳南麓・金生遺跡と縄文晩期の地域的諸問題」どるめん29 1981
註12 田中国男「縄文式・弥生式接触文化の研究」1944
註13 亀井正道「人面付土器の新例」考古学雑誌43-1 1957
註14 石川日出志「人面土器」季刊考古学19 1987
註15 坂詰秀一・関後彦「弥生後期の人面土器について」考古学雑誌48-11962
註16 群馬県埋蔵文化財調査事業団『有馬遺跡Ⅱ』1990
註17 群馬県埋蔵文化財調査事業団『小八木志志貝戸遺跡群Ⅰ』1999
註18 神沢勇一「神奈川県出る畑遺跡出土の人面土器」考古学集刊3-3 1967
註19 a 永峯光一「保科村片山発見異形土師器の出土状態に就いて」信濃5-1 1953
註19 b 大場磐雄「挙手人面土師器覚書」信濃5-1 1953
註20 長野県埋蔵文化財センター『北村遺跡』1993
註21 茅野市教育委員会『中ッ原遺跡』2003
註22 戸倉町教育委員会『円光房遺跡』1990
註23 a 清野謙次『日本民族生成論』1946
註23 b 久永春男・斉藤嘉彦「盤状集積葬の新例」どるめん5 1975

♪ 編集後記 ♪

次男が弓道をやっていることがきっかけで、鉄鏃に興味を持ち始めた。最近ネットオークションで古いものではなさそうだが、定角式、雁股式等の鉄鏃3個を1500円で落札し、悦に入っている。

古代の鉄鏃についても少しずつではあるが勉強を始め、その面白さに引き込まれ始めている。長野県の限定された時代・地域の弥生土器にしか興味のなかった私が大きく変わりつつある。

本号では、関東はじめ広い知見をもつ執筆陣から多角的な視野で考察する重要性を教えていただいた。今後、更なる研鑽あるのみ。(小山)

佐久考古通信 No.115

発行所 佐久考古学会

〒384-0091 小諸市御影新田1945-6

桜井秀雄 方

郵便振替 00570-9-2842

☎ 0267 (32) 8922

発行日 2016年6月18日

発行者 桜井秀雄

編集者 小山岳夫

印刷所 ほおずき書籍(株)



佐久考古学会
シンボルマーク